



「病気を寄せつけない
腸寿食」

藤田紘一郎、魚柄仁之助 著

健康食ブームに振り回されていている方は、一度シンプルで根本的な食のあり方を学んではいかがか。本書は免疫力を高め100歳まで生きることを提唱する藤田氏とそのためどんな調理法でどのように実践するのかを示す魚柄氏の共著だ。今号の魚柄氏の連載にもあるので読んでもらいたいが、言っていることは「当たり前のこと」だ。ふだんは忘れがちになる本来の食の形を思い起こさせる提言である。●毎日新聞出版 1200円＋税



「里山産業論」

「食の戦略」が六次産業を超える」

金丸弘美 著

地域のブランド化を成立

させ、お金も地元で落とせるのは補助金や工場ではなくその地の「食文化」だ。それが人材を育成し雇用も生みだす。そう主張する著者は有川浩のベストセラー「県庁おもてなし課」文庫版の解説対談にも登場する「食」を通じた地域づくりの専門家。その著者の講演会に行ったのは15年くらい前だったろうか。その時すでに精力的に取材活動を進めその成果を発表していた。本書のベースに長年の取材データとノウハウがあるのだ。安倍政権の「攻めの農業」という空疎なかけ声に距離を置きつつ読んでみたい。●KADOKAWA 800円＋税



『原発の安全性を保障しない
原子力規制委員会と
新規制基準』

奈良本英佑 著

福島原発事故後につくられた原子力規制委員会とは何なのか。川内原発再稼働にあたっての記者会見で田中俊

一委員長は「稼働の是非については、原子力規制委員会、規制庁の判断の範囲の外にあります」と述べている。原発をめぐる行政機関の中心になりながらなぜこのような発言になるのか、その体制と根拠となっている新規制基準を解説する。●合同出版 741円＋税



「赤旗」は、言葉を
どう練り上げていくか」
河邑哲也 著

「赤旗」とは言うまでもなく日本共産党の機関紙。編集屋の興味から何気なく手に取って読み始めたら存外面白かった。著者は校閲部所属でその苦勞が行間にかがえる。最初のキーワードの「入籍」では、家制度を前提にした旧戸籍法に基づく言葉で、新憲法に基づいて「婚姻届を出した」「結婚した」と書いていること。こんな左翼政党らしいこだわりだけでなく幅広い言葉を扱っている。●新日本出版社 1200円＋税